

名作の舞台を訪ねて

——世界文学紀行にまつわるエピソード・余談——

<講演ではパワーポイントで50枚ほどの写真を紹介していますが、重くなるため

ここでは各作品の代表的な写真のみ載せています>

ただいまご紹介いただきました清水武でございます。こうして皆様とお話をさせていただく機会を与えてくださいますありがとうございます。ここ八千代市は1970年代には全国一の人口増加率となった成長都市、日本初の住宅団地も誕生し、アメリカ・テキサス州のタイラー市、またタイのバンコク市と姉妹都市となっているとも聞いています。そんな未来と世界に開かれた町で、海外の文学について報告をさせていただくのは、私にとっても大変光栄に存じている次第です。

ちょうど1年ほど前にも勝田台自治会の関係の方にお呼びいただき「シニアライフの充実」といったテーマでお話させていただきました。そのときお目にかかった方もこの会場にもいらっしゃるかと思いますが、改めて最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。

自己紹介

昭和16年(1941年)、信州・長野県に生まれました。ちょうど太平洋戦争が始まった年で「武」という名前は、男は武士のように強くあれ、といった親の願いだったようです。

早稲田大学を卒業後、国立にあるNHK学園高校の教諭として勤務、その後、聖教新聞社に入社し、特派員としてパナマに10年間駐在しました。この間に北南米およびヨーロッパの32カ国を訪問する機会に恵まれました。

2001年に定年退職し、1年目には昭島市近くの横田基地内にあるセントラル・テキサス・カレッジで学び、2年目の2002年にはスペインのマラガ大学に1年間留学しました。

現在は、海外留学アドバイザーとして信濃町の元の職場で留学する学生へのアドバイスや海外から来日したSGI(創価学会インタナショナル)メンバーのアテンドをしたりしています。また地元では、昭島市が主催する高齢者向けの英会話教室の講師を務め、シルバー人材センターで市報の配布、さらに理事・広報委員長として会報の編集長も仰せつかっております。また同センターでは、5年ほど前までは、駅前の自転車管理の仕事もしてきました。

一方、ボランティア活動として、NPO法人の立川多文化共生センターで在日外国人の支援と、視覚障害者が聞くCDに録音する原稿の執筆、それに地元の中学校で授業についていけない生徒の指導にもあたっております。

こうしたなか、定年5年後となる7年前からライフワークとしての「世界文学紀行」を始めました。動機は二つ。

一つは高校時代に恩師がいつも言っていた言葉です。

「大作を読みなさい。大作を！今はすべてがわからなくてもいい。でも読んだ後にはきっ

と偉くなったような気がするよ。きっと・・・」

その指導に刺激されて、文学少年でもなかった私も結構な数の大作に取り組んだものでした。私の場合、偉くなったような感じこそなくても、とにかくも大作を読み切ったという満足感がありました。そんな青春時代からのいきさつがあったことです。

二つ目は、定年になり時間ができたところでもう一度読み返し、さらに特派員時代にせつかく培った英語とスペイン語を生かして、海外の「名作の舞台を訪ねて」原稿を書き、できることなら新聞や雑誌に寄稿しようと思いついたことです。

レポートや写真は自分のHPにも載せていますが膨大な量になりますので、今日はその中から面白いエピソードだけ抜粋してお話させていただきます。文学作品そのものについて興味のある方は、どうぞレジユメにあるHPのアドレスからアクセスなさってみてください。

あゝ 禿げた頭でも値引きなしか？！

さて、今日こちらにお邪魔し、会場に私と同じような仲間がいることを拝見し力強さと親しみを感じております。この頭です。

先日、こんなことがありました。

私は年金生活に入ってから、現役時代と違ってできるだけ節約生活を心がけています。散髪代もその一つです。床屋さんに行くのをやめ（ここに床屋さんはいないですね）、けっこう手先の器用な家内がハサミを操り、私の頭を刈っています。これで毎月3000円から4000円かかっていたものがただになりました。

現役時代と違い、社内で身なりを整えたり、若い女性に気に入られようとする気遣いが少なくなったからです。本当はそれじゃいけないんでしょうがね。

「年を取るほどにおしゃれを」というのは女性ばかりでなく男性にも適用されるものですが、私の場合、なんてったって髪自体があまりないので、頭のおしゃれの仕様がありません。

とはいっても、大事な行事に参加するときや、大切な人と会わなければならないようなときには、やっぱり床屋さんに行くんですね。

でも、この頭です。他のお客さんよりも髪の毛のある部分がぐっと少ない。

そこで散髪が終わり料金を払う段になって、店主に言ってみたんですね。

<落語の話し方で>

「マスター、ほらご覧のように、私の頭は他の人の髪の毛の量の半分以下ですよ。禿げている部分はまったく手をかけなくてもよいし。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」と、その主人、なんて言ったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪の毛は少ないです。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変な気を遣ってハサミを動かしているわけです。逆にこちらが割増料金をいただきたいくらいですよ」



敵もさるもの、上手をいくもんですね。

私の頭を見てあの中高年のアイドル、綾小路きみまろさんだったらこう言うでしょう。

「中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。あれから50年、昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ・・・」

ともあれ、頭が輝いていること即、人生が輝いていることには通じませんが、でも、頭の輝きのように、定年後の人生も輝かせていきたい、というのが今日の私の講演の陰のテーマであります。

12 年間の海外生活で41 カ国を訪れる

前置きはこのくらいにして、さっそく表のテーマ「名作の舞台」についての余談に入っていきたいと思います。

私はこれまでの人生を通算しますと、海外にいた期間が12 年間ほど。現役時代に特派員として訪れた国、また定年後に文学紀行で訪れた国を合わせるとちょうど41 カ国になります。地域的には主にヨーロッパとラテンアメリカつまり中南米でした。

文学紀行で最初に取り上げた作品はスペインのセルバンテスの『ドン・キホーテ』でした。7年前、ちょうど作品の出版から400 年という年でした。そんな背景もあって、このときの紀行文は郷里の信濃毎日新聞に5回にわたり連載され、それはまたセルバンテスの生まれたスペインのアルカラ市の新聞にもスペイン語で掲載されました。

その後、「風と共に去りぬ」の舞台アトランタとニューオーリンズ、出版100 周年の「赤毛のアン」の舞台・カナダのプリンス・エドワード島、「ロミオとジュリエット」や「ベニスの商人」のイタリア、「ハムレット」の城がありアンデルセンが生まれたデンマーク、ゲーテの「ファースト」や「若きヴェルテルの悩み」、ヘッセの「車輪の下」、それにグリム兄弟の生まれたドイツ、トルストイの「戦争と平和」、ドストエフスキーの「罪と罰」のロシア、そして去年は、ヴィクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」、アレクサンドル・デュマの「三銃士」のフランスを訪れてきました。

今年は日中関係が落ち着いたら「三国志」と「大地」の舞台を訪ねることを予定しています。どれも青春時代に胸躍らせた、また大人になって人生を深めさせてくれた作品です。

こうした旅費や取材費を原稿料でカバーできれば理想はですが現実はそんなに甘くありません。私自身の力不足もあります。ですから取材費の3割でもカバーできれば上出来だと思っています。ぜいたくを言うてはいけない。自分でも旅を楽しんでいるわけですから・・・

幸い、夫婦二人つつましく生活していけば年金でなんとかやっていくことができる。そこで足りない取材費を補うために、いろんな仕事をして今も一生懸命働いているところです。

ドン・キホーテの由来

ところで、私は定年後の自分に「東京のドン・キホーテ」との名前を付けました。
——なぜ、私がドン・キホーテなのか？

それは、小学校の6年生までさかのぼります。学芸会にクラスで「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私が家来のサンチョ・パンサ役を演じたのがきっかけでした。以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて、少年向けの本を、大人になってからは全訳本を通読したものでした。また10年ほど前、信濃町にある日本スペイン協会で、原書による勉強会があったとき、1年間出席しました。さらに、松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も東京で3回、見に行きました。かなりの凝り性だったといえるかもしれません。

二人の間でやり取りされる諺は、実に示唆にも富んでいます。正義を求め、悪と戦うために槍をかかえ風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化ともいえます。

セルバンテスは58歳のとき前編を、68歳のときに後編を出版しました。亡くなったのは奇しくもシェクスピアと同じ1616年でした。

ということで、400年前、槍を持ち愛馬ロシナンテに乗っていたスペインのドン・キホーテに対して、現代の東京のドン・キホーテは、槍の代わりにカメラを持ち、馬の代わりに飛行機に乗って“見果てぬ夢”に向かって文学の旅を続けている次第です。

ラ・マンチャの風車の風景



小説「ドン・キホーテ」でもっとも有名なくだりは、主人公のドン・キホーテが遠くに見える風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ場面でしょう。

<浪曲調に>

——この時、あの大野には今もある粉挽場の風車が三、四十あらわれた。ドン・キホーテは、それに目をとめるやいなや、従士に言った。

「天はわたしたちの仕事を、願ってもみられないほど上首尾に、運んでくださるぞ。それ、あそこを見なさい、サンチョ・パンサ。山のごと

き巨人が三十びき、いや、もちっとじゃろうな、立ち現れたではないか。かれらと一戦におよび、みなごろしにしてくれよう……」

「巨人がどこに」と、サンチョ・パンサがきいた

「それ、あそこに見える長い腕のやつらじゃ」と、主人が答えた。「なかには、腕の長さ二里に達するのさえ珍しくないぞ」

「おめえ様、待ってくんせえ」と、サンチョ。「あそこにめえるは巨人でねえ。粉挽場の風車ですすよ。腕とめえるのがね、それ、風でまわって石臼を動かす、はねぎだあよ」

.....

サンチョの止めるのも聞かずにドン・キホーテは乗っているロシナンテに拍車をくれ、

一ばん手前の風車に突いてかゝった。すると、槍先がはねぎにふれるよと見えた時、にわかにかき起こった風が恐ろしい勢いではねぎを回転させたから、槍はぶち折れるし、馬と騎手はそっくりさらわれて、後方へぼんと棄てられ、さんざんな態たらくで、野っばらどころがっていった（永田寛定訳）――

作品の全部を知らない人でもここだけは知っているも多いでしょう。あまりにも有名なシーンですね。

私たちがタクシーを雇い風車の並ぶその丘に上ってみました。10基の風車が点在していましたが今はどれも回っていません。かつては風力を利用し、粉ひきに活用していたものですが、現在は完全に観光用と化していました。

エル・トボソ：村長の“村起こし”

ここからは現実の話です。

あるとき、ラ・マンチャの平原にボツンとあるトボソ村のマルチネス村長は考えました。「何もない貧しいわが村をどうしたら栄えさせていけるだろうか」。思案の末、思いついたのは、村が小説「ドン・キホーテ」の舞台であることでした。作品は聖書に次いで世界で最も多くの言語に翻訳されています。

「よし、世界中のドン・キホーテの翻訳書をここに集めて展示しよう」。村長はさっそくペンを取り、各国へ手紙を送りました。

翻訳書は続々と届くようになりました。国家元首、大統領や著名人の署名の入ったものが次々と。トボソ村は一躍、「ドン・キホーテ」愛読家の訪問地となり、国の内外から観光客が押し寄せるようになったのです。人が集まる町は栄える――“村起こし”運動はすばらしい結実をもたらしたのです。

私もそのドン・キホーテ図書館を訪ねてみました。と、朝の早い時間ということもあって、他の訪問客もなく、館長自らが案内してくれるとの光栄にあずかったのです。

全部で54カ国語の「ドン・キホーテ」がありました。2階建ての各階の陳列棚には言語別の翻訳本とスペイン語による短い説明があり、アメリカのレーガン大統領、イギリスのサッチャー首相、フランスのミッテラン大統領、ポーランドのワレサ大統領、南アフリカのマンデラ大統領など。中にはイタリアのムッソリーニからのものもあり、歴史の一段面をのぞかせているようでした。

ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、ヒンズー語、ベトナム語、トルコ語、エスペラント等々。日本語では1927年の高田早苗による最初の訳本のほか、その後の翻訳者による訳本も数種類、置かれていました。

こちらが遠い日本から取材に訪れたと知ると、館長は「村長にお会いになりますか？」と尋ねてきました。思いもかけず、由緒ある村の村長さんに会えるなんてこんなラッキーなことはありません。

「ええ、ぜひお願いします！」と私。会見はすぐ近くの庁舎の村長室となりました。ナティビダー・マルチネスさん。女性村長です。ジーンズにジャンパーの仕事スタイルでテキパ

キと動く名村長の感じです。村の歴史、訪れる観光客、日本の最新事情等について話が弾みました。いろいろと聞きかったのですが、突然の訪問でもあり、多忙な村長の時間を費やしても申し訳ないので、20分ほどでおいとました次第です。旅ではこんな予想外の楽しいハプニングもあるんですね。

ところで、「ドン・キホーテ」への日本人の関心は意外に高い。それはこっけいな冒険譚（たん）もさることながら、狂気と言われながらも理想に向かって突き進む主人公のどこかに惹かれるものがあるからではないか、と私は思うのです。特に未来に夢を描くことが難しい今の日本社会にあってはですね……。

ミュージカル「ラ・マンチャの男」でドン・キホーテがつぶやいています。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ、本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」——

私もこの言葉をモットーとして、世界文学紀行という“見果てぬ夢”に向かったの旅をしているところです。

「ディアリオ・アルカラ」の紹介

「ドン・キホーテ」は文学紀行の第一作目だったので少々詳しくお話ししました。これから全部の作品についてこのようにお話するには時間がありませんので、いくつかの作品についての山場またはエピソードの部分に絞ってご紹介していきたいと思います。

風と共に去りぬ

人々の心を潤し感動を贈ってくれるもの——その一つが文学でありもう一つは映画ですね。聖書に次いで世界で最も読まれているという『風と共に去りぬ』が2006年6月、出版70周年を迎え、私は舞台となったアメリカ南部のアトランタ、ジョージア州、ニューオーリンズの“現在”を訪ねました。



今から半世紀以上も前、まだ自分が中学生の頃のことでした。信州のローカル線（飯田線）の駅前広場の看板に、当時としてはとてつもなく大きな映画のポスターが貼り出されました。鮮やかな色調に英語のタイトルが入った画面をバックに、豪放な男性と美貌な女性の接吻シーンが、子供心にも強烈な印象を残したものでした。

『風と共に去りぬ（“Gone with the wind”）』は、小説もですが、この映画によって世界中のファンを魅了したといえるでしょう。マーガレット・ミッチェルが本を出版したのが1936年。映画はその3年後に公開されました。小説は長編で読了には結構な時間と努力が求められます。映画も4時間を超える長編ですが、10部門でアカデミー賞を受賞した映画史上、

不朽の名作。波乱万丈のストーリーとロマンが一気に視聴者を惹き込んでいく。仮りに本を読んでいなくても映画を観ている人は多いでしょうか。この会場で映画をご覧になった方は何人くらいいらっしゃいますか？

私はまずアトランタに住む友人の運転する車でジョーンズボロを訪れました。物語の舞台「タラ」とされる土地です。かつて南北戦争に向かう兵士たちを乗せた列車の通るジョーンズボロの駅舎が、今は『風と共に去りぬ』の博物館となっていました。館内には小説に関する資料、各国で出版された初版本、映画の作成時のエピソードや写真、撮影に使われた衣装等が展示されていました。

館長のバージニアさんに聞いてみました。60代を思わせる銀髪品の品のある婦人です。「ええ、毎日、世界中から愛読者がやってきます。国内は全ての州から。国外で多いのはイスとドイツかしら。先月はロシアから大勢、それに中東の国々からも来ましたよ。そうそう、タラの故郷アイルランドからも若い人たちが訪ねてきたわ。夏のシーズンには日本からも1ヶ月に300人くらいはやってきますね」

アイルランドから移住し、タラの農場主となったジェラルド・オハラ、妻である淑女エレンが奴隷を使いながら農場を経営していく。わがままで気の強い夫妻の娘スカーレットと心優しい淑女メラニー、豪放で現実的な男性レットと軟弱な哲学青年アシュレを対比することによって、ミッチェルは読者の心をつかむのに成功しました。

戦争が始まると、南部の人たちは自分たちの勝利を疑わなかった。ただ、レットと、アシュレだけは南部の運命を予感していました。それぞれ対照的な性格を持つ人間が、このタラとアトランタを舞台に戦争のはざままで生き抜き、ある者は死に、愛への葛藤を繰り広げていったのです。

レットが手綱を取る馬車で戦火のアトランタを逃れ、タラに帰ってみると母親は死に、父親は発狂し、奴隷は逃亡していた。食物もまったくない。絶望の底からスカーレットは立ち上がっていきます。

私には、ここでスカーレットの生きざまがかみ合ってくるのです。南軍が敗れ、貴族的な南部社会は風と共に去っていった (A Civilization gone with the wind)。彼女の最後の支えとなったのはタラの赤土でした。勝気だったスカーレットは、今度はその意志の強さで、自分の人生を開き、家族や周囲の人々も救っていきました。時代が、社会が混沌としているときは、勇気あるものが生き残っていくのですね。

物語は次の言葉で結ばれています。

“After all, tomorrow is another day” .

日本語の書籍ではさまざまに翻訳されていますね。

「明日はまた明日の陽が照るのだ」

「明日は明日の風が吹く」

「何はともあれ、明日はまた別の新しい日なのだから」

.....

すべてを失った後で、彼女が再び未来に向かって生き抜いていこうとする言葉として、私は次のような意味をこめて訳しました。

「明日はまた新しい人生の始まる日」。「すべてはこれから始まる」という仏法で説く「本因妙」に通じています。その意味でこの言葉は、各国でさまざまな苦難に直面している人々、人生のどん底で闘っている人々に、限りない勇気と希望を贈ってくれるような気がするのです。

<写真：キング博士の家、CNN本社の見学、アトランタとニューオーリンズの街>

シニアこそ読もう「赤毛のアン」

「風と共に去りぬ」の翌年は「赤毛のアン」の舞台を訪ねました。

「エッ！ いい年をしたオジサンが少女物語の舞台を訪ねるの？」——口にこそ出さなくても、我が“悪友”たちは心の中でこう思っていたかもしれません。私自身、最初はちょっとした気恥ずかしさも抱いていたのですが、それは今をときめく脳科学者・茂木健一郎氏のアン番組出演で消え去ったのです。

2008年3月、『赤毛のアン』100周年を記念する特集がNHKで組まれました。その番組の中で氏が言ったのです。

「若い時からアンのファンだった。でも、男が読んでいるとからかわれるので、自分は隠して読んでいた」そして「古典は何度読んでも新しい発見がある」と。

その言葉に私も自信をもって取材準備を始めました。まずは作品の原書に挑み（比較的やさしい英語です）、NHKのアンについての英語番組を視聴、劇団四季でミュージカルも鑑賞しました。さらに、日本で最初の村岡花子訳と直近の松本侑子訳を読み比べ、松本侑子が東京・青山で直接担当した「原書で読む赤毛のアン」講座にも出席したのでした。



6月半ば、カナダのプリンスエドワード島に飛びました(地図)。グリーンゲーブルズのりんごの花がちょうど満開でした。孤児院にいたアンが初めてグリーンゲーブルズに着いたのも6月、りんごの花が白く咲きあふれていたころでした。一人で置き去りにされた鉄道駅から、マシューが手綱をとる馬車でやってきたのです。

アンが住んでいたハウスには各国からの見学者が押しかけていました。地元カナダの各地から、お隣のアメリカから。ヨーロッパからは主に東欧の国々。アジアからは日本、中国、韓国が多いといえます。日本からは若い女性と中年の婦人が目立っていました。

島に着いた翌々日からは、物語の舞台の本場でのミュージカル公演が始まりました。毎年、夏になると催されてきた公演は44回目。ガラ公演に先立って、全キャストが揃ってのサイン会と記者会見が行われました。

私は前日のプレ公演の感想と日本での“アンブーム”を伝えた後、主役のアン、準主役のマシューにインタビューしました。

アン（アミー・ワリス）：「記念すべき年の主役をいただいて光栄です。おしゃべりでチャーミング。そして勇気もある。どこまでも希望を失わないアンは、永遠に私たちの“生き方の鏡”だと思いますワ」

マシュー（サンディ・ウィンスピー）：「高齢になるにつれて、身体だけでなく心まで枯れてしまう人も多い。年を取るほどにアンのような『心のみずみずしさ』が必要になってくる。作品は少女たちだけでなく、すべての大人に通ずることを訴えたい」

本へのサインが終わると私は可愛い美人のアンと並んでカメラにおさまりました。私が差し出した原書の表紙裏にハートマークをつけて書き込んだ彼女の言葉は：

“To Takeshi: Much love, Anne Shirley, Amy Wallis”（武さんへ：心からの愛をこめて——アン・シャーリー〈アミー・ワリス〉より）でした。

日本、カナダ、どちらのミュージカルでも、アン役の歌唱力、おどおどし口下手なマシュー役の演技が際立っていました。アンがマシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、育てる二人は年老いていく人生の無常、人間の情愛の深さ・・・

マシューが亡くなり、アンが大学進学を断念、マリラを支え、再び自分の道を切り開いていこうとする最終幕は、観客の誰もが涙を誘われ、感動を禁じえません。

島をめぐる旅のなかで車椅子の日本婦人に会いました。九州の宮崎から羽田、成田、トロントの空港を経由して州都シャーロットタウンへとたどり着いた。60歳の誕生日を祝い、娘二人が旅をプレゼントしてくれたのだといいます。リウマチで足が悪く、娘さんの一人が付き添って人生で初めてとなる海外旅行とのことでした。

「車椅子で大変だと思いましたが、カナダに着いてみると、みんなが障害者にとっても親切で感動しました。40年前にアンを村岡花子さんの訳で読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。アン・シリーズも全部読みました。プリンスエドワード島は、牧歌的な広々とした光景で心が洗われる思いです。空気も澄んでいて、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアンの生き方は、40年来の自分の支えでもありました。送り出してくれた娘たちに、親切に面倒を見てくださったカナダの皆さんに心から感謝しています」

夢を抱いて努力していれば、いつかは実現できる。アンが教えてくれた一つの例のような気がします。マシューの言うとおり、歳を重ねるにつれて夢を失い、身体だけでなく、心まで枯れてしまう人も多い。歳をとるほどにアンのような心のみずみずしさを持ちたいものです。

シニアになって「アン」を読む、または読み直すところに、自らの心の若返りもあると実感しているところです。私は今も「シニアこそ読もう『赤毛のアン』！」と訴えている

ところですよ。

文学作品の紹介が続き少しお疲れかもしれません。ここからは余談、面白い話だけを紹介していきたいと思います。

イタリアの各地を訪ねる

ここで質問です。永遠の純愛小説「ロミオとジュリエット」の舞台はどこでしょうか？そう、イタリアのベローナですね。「ベニスの商人」もイタリアです。ところが、作者のシェクスピアはこの地を訪れていないとの説が有力です。でもベローナの町にはジュリエットが住んでいたという館がありました。

映画が作られ作品が有名になってから作られたというのです。

<声音>「おお、ロミオ、ロミオ、あなたはなぜロミオというお名前なの？」
——ジュリエットがロミオに愛をささやいたという2階のベランダもありました。

階下の庭にはジュリエットの等身大のブロンズ像があり、その細い手やふっくらとした胸は観光客が触ったり撫でた跡でとりわけ輝いていました。触れば恋が実るとの言い伝えがあるという。若者の心理は世界どこでも同じなんですね。



シニアの休日 in Rome

イタリア滞在でもう一つは、映画「ローマの休日」です。制作されてから半世紀あまり。白黒の画面ながら、あの新鮮な感動と鑑賞後に残るほのぼのとした情感は変わっていませんね。アン王女を演ずるオードリー・ヘップバーンはあくまでキュートだし、新聞記者を演ずる渋いグレゴリー・ペックもおおらかな人間愛がにじみ出ています。

その映画のロケ地をたどって「シニアの休日 in Rome」としゃれてみました。

夕方訪れたスペイン階段は大にぎわい。外灯が記念写真を撮る人々の顔を照らしていました。アイスクリームを食べていた王女と新聞記者が再開した石段の付近では、恋人たちの抱擁とキスが絶えません。ここでも若者たちはゲンを担ぐのでしょう。

「真実の口」のある教会では、入り口にある直径2メートルほどの円盤に海神トリトンの顔が刻まれ、大きな口が開いています。嘘つきは手を入れると抜けなくなる、との伝説がある。映画でも身分を隠しウソを言っている王女が、こわごとと手を入れ、引きずり込まれそうになるシーンが面白かったですね。実は、円盤は古代ローマ時代のマンホールの蓋だった



といひます。いつ、誰か知りませんが、よくぞまあ、上手に伝説を創り上げたものですね！

映画は、おとぎの国の夢物語だけれど、ロマンがあり愛があります。王宮の籠の中の鳥から飛び出し自由な市民の生活を体験したい——儀

式に追われる王女の窮屈さが想像できるがゆえに、彼女の勇気ある行動に誰もが共感、護衛から逃げる時の応援さえしてあげたい気持ちになるのでしょう。

安易なハッピーエンドとせず、記者とカメラマンの二人が信義をかけて王女を守った、というほろ苦い男の切なさ最後の記者会見の感動シーンが、なおさら鑑賞者の胸に消えない何かを残すのでしょう。そんな想いを回想しながらの、シニアの「ローマの休日」となったのでした。

イタリア最近トイレ事情

歴史遺産そして芸術と美食の国イタリア。ピザ、スパゲッティ、ワインを味わいながらの楽しい旅でしたが、一つ、とても困ることがありました。それはトイレです。

「イタリア人はみんなウンコをしないんかな？」なんて冗談めいた疑問まで出てきます。私も「トイレ学者」でもなく、全国の実態調査をしたわけではないので、以下の話しは決して正確とは言い切れません。たった 1 週間あまりのイタリア滞在の間に私の目に映った事実と印象です。偏見があるかもしれません。

でも、「海の水が塩っからいのを知るのに、太平洋の水を全部飲まなければならないということはない」との言葉もあります。食事とともに人間が生きていくための最も大事な営みの一つ——この“用を足す”という営みに、ことのほか気を遣わざるを得なかったからです。

以下は、思い出すままに綴った見聞・体験記からの引用です。



- まず、どこに行ってもトイレの数が少ない。空港でもレストランでも観光地でも。到着したミラノの空港。バゲッジクレイム場で自分のトランクが出てくる間に、フロアーの端にあるトイレに小用で駆け込んだ。二つの仕切りのある扉を押し入ってみて驚いた。男性用の「小」用は一つのみ。「大」用に二つあっただけだった。早く済ませて次の人に、と力んでも、哀れなるかな、高齢からくる前立腺肥大の傾向があり小用でも時間がかかる。そのときは、自分の後には一人だけで助かった。もし大勢が一行に並べられたらどうなるだろうか、と一瞬思ったものだ。
- このトイレの件では食事の前や移動の際、ガイドが口をすっぱくして強調していた。「バスに乗る前に必ずトイレを済ませておいてください！レストランでもトイレは男女一つずつしかありません。私たちのグループ 30 人あまりの人が食事を終わって一斉にトイレに行ったら、仮に 1 人 2 分でも 1 時間かかってしまいます。次のスケジュールに間に合いません。どうか皆さん、食事中でも頃あいを見はからって、遠慮なくどんどん行くようにお願いします」
- 一部を除いて、全体的にどこもあまりきれいではない。設備も古い型だ。近年、JR の駅のトイレがずいぶん近代的できれいになっており、また各家庭にウォッシュレットなどが普及している日本から訪れると、ルネッサンスの発祥地イタリアに来て、なんだか半世紀ほど昔に戻ったような感じになる。一方で、ホテルの便器の隣には日本

にはないビデがある。かつて、ここで顔を洗った日本人旅行者がいた、なんて笑い話が語られたこともあるが……。ガイドの説明によると、実はウォッシュレットの淵源はこのビデだという。ただイタリアでは水質が違い（石灰質が多い）ノズルが詰まってしまうため適用されていないのだという。

- ▶ 便座が壊れ、あるいは盗まれてしまっているもの、ドアの鍵が壊れてしまっているものもある。帰途のローマのレオナルド・ダ・ヴィンチ空港の出発ロビーの男性用トイレ。大用が7つあった中で3つが壊れていた。一つはドアのノブが回らず出入りができない、一つは入って閉めるとロックが壊れていてドアが閉まらない、一つは誰か使っているわけでもないのにドアが閉まっていて開かなかった。
- ▶ 公衆トイレのほとんどが有料である。ハイウエイのドライブインでも同じ。使用料というのだろうか、それともチップといった方がよいのだろうか。ちなみに料金は訪れたミラノ、ベローナ、シエナ、ローマ等の都市では大部分が1回 50 ㊦（約 70 円）だった。水の都ベネチアでは、たった 100cc 前後（人によって違いがあるが）の水を体内から排出するのに2ユーロ（約 280 円）も払わなければならなかった。生理現象とはいえ、何回も利用したら結構な額になる。ここで、イタリアを訪れる旅行者が、ホテルの外で1日に何回、用を足すか、そのチップの合計額を想像してみるとよいだろう。

——以上、日本からの一旅行者としての体験です。大好きになった、またお世話になったイタリアの悪口を言うつもりは毛頭ありません。

食とともに人間にとってトイレは最も切実な課題です。素晴らしい歴史遺産をもつ観光大国のイタリアが、外国(特に日本)からの観光客の印象をさらによくするための参考になれば、との強い願いと思いを込めて綴ったことをご理解ください。

その一方で、これがイタリアに関心のある方への日伊の文化比較、生き方比較、考え方比較のための軽い読み物になれば、こんな喜びはありません。この機会に、未開民族も含めた世界のトイレ文化の研究も意義ある貴重な仕事、どなたか取り組んでくれたら面白いだろうナ、なんて思った次第です。

※ 後日、在京のイタリア大使館(大使)宛てに丁重な手紙をつけてこの原稿を送ったのですが、何の音沙汰もありませんでした。

どうしたのでしょうかね？ 怒ってしまったのでしょうかね？

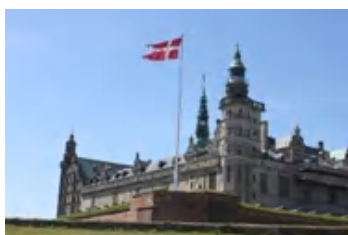
デンマーク・ドイツ

シェクスピアと言えば四大悲劇の一つに「ハムレット」が挙げられます。その舞台はデンマークのヘルシンゴーにあるクロンボー城。イタリアを訪れた翌年、このデンマークとドイツを訪れました。

「ハムレット」の冒頭はこのクロンボー城に、叔父に殺された父親の亡霊が出るところ

からです。バルト海岸にある城はいかにもそんな趣をかもし出していました。私は物語のイメージをたどりながら、お城の塔から降りると展示室から教会へ、さらに薄暗い地下壕まで歩を運びました。でも、ひとりの探索では、母親の王妃との会話はどこの部屋でなされたのか、ポローニアスの刺された事件現場はどこなのか等はわかりません。

そこで入場料を払った受付に戻ると、その日の責任者らしい男性に聞いてみました。と、両手を広げジェスチャー豊かに話す責任者からは予期もしなかった言葉が返ってきたのです。



「Nobody knows! (誰もわかりませんよ)」。氏の話しっぷりからは「そんなこと言ったって、そりゃ無理ってもんだぜ!」といった少々くだけた訳が合うでしょう。

なんとも“名言”だと思ったものです。だって架空の話の舞台がどこかはわかるはずがない。それでも、訪問記のなかには、案内嬢が「ここがオフィーリアとハムレットが言葉を交わした場所でありまして・・・」と説明された、なんて記述もありました。観光地としてはそこまでサービスしないと訪問客の期待に応えられないからでしょうね。

シェクスピアはデンマーク国民史をもとに『ハムレット』を書き、このクロンボー城の名を不朽にとどめました。その主人公の性格や発した言葉の解釈については、長い文学史のなかで、最も論議された、最も魅力的な人物の一人でしょう。

とりわけ人口に膾炙している言葉は、” **To be or not to be, that is the question!**” ですね。

様々に訳されていますが、最も受け入れられている訳は、「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か」）それが問題だ」だと思います。

中世の英語を翻訳できるような力は私にはとてもありませんが、それでも再度、作品に目を通し、舞台の現場を訪れた自分としてはこの部分を次のように訳してみました。

「**To be** 何が真実なのか、**or not to be** 何が真実でないのか、嘘なのか、**that is the question!** それを究めるのが最重要課題である」

これは、人間対人間の葛藤の中で、正義と真実を求めて懊悩するハムレットの生命からの叫びなのです。そしてこの重い言葉は、今を生きる私たちにも、人生のあるべき生き方とは何なのか、本当の正義とは何なのか、根本的な問いを投げかけているような気がするのです。

子供たちに夢を贈る童話作家

ところでデンマークと言えば童話でおなじみのアンデルセンが生まれた国です。そしてすぐ隣のドイツにはグリム兄弟が生まれています。この二人の童話作家の他に、ドイツではゲーテの「ファースト」と「若きヴェルテルの悩み」そしてヘッセの「車輪の下」の舞台を回りましたが、時間も押しており内容も少し難しいので省略し、ここでは皆さんに一

つの質問をしてみたいと思います。

次の10の童話の作者（出典）は誰（何）でしょうか？

赤ずきん 狼と七匹の子ヤギ ブレーメンの音楽隊 白雪姫 人魚姫 裸の王様
醜いアヒルの子 マッチ売りの少女 アラジンと魔法のランプ アリとキリギリス

誰でもが聞いたことのある作品です。でも、正確に当てるのは意外に難しい。正解が8割以上だとしたら、その人はきっと幼稚園の先生や保育園の保母さんで、一般の市民だったらよほど童話に深い関心を寄せている人でしょう。

正解は、最初の4つがグリム童話、次の4つがアンデルセン童話、そして「アラジンと魔法のランプ」は千一夜物語、「アリとキリギリス」はイソップ童話からなのですね。



アンデルセン博物館の前には池が広がり、緑の芝生の上では見学を終わった高校生たちが遊び戯れていました。私が建物の概観や池の撮影にカメラを向けていると、突然、一人の女子高校生が声をかけてきました。

「写真を撮って！」

可愛らしい金髪の少女の呼びかけです。

「こちらは日本からのカメラマン。写真はもしかしたら日本のどこかの雑誌に載るかもしれませんよ」と冗談交じりにOKすると、彼女は仲間全員と賑やかにポーズをとったのです。ピチピチとなんともくったくの妖精のような未来に満ちた美少女たちでした。

（レジュメにある写真です）

ドイツでは中世の古城が並ぶライン川紀行もし、「ローレライ」の歌のいわれとなっているライン川に突き出た岩山も写真に収めてきました。

<ライン川クルーズの写真各種>

さて、時はだんだん上がってきて、一昨年はトルストイの「戦争と平和」、ドストエフスキーの「罪と罰」のロシアでした。両作品ともとても簡単には論ずることのできない超大作です。興味のある方はホームページのリポートをご覧ください。ここではロシアのジュンブライドたちの楽しい話しをご紹介します。

エッセイ「6月の花嫁 in Russia」から

6月初めのロシア文学の旅は、思いがけず楽しいシーンも用意してくれていました。訪れる先々で、幸せそうな何組もの新婚カップルに遭遇したことです。





サンクトペテルブルク、モスクワ、それにトルストイの家博物館のあるモスクワから 200 キロ南のヤースナヤ・ポリャーナで・・・。出会った数は 20 組を超えていました。

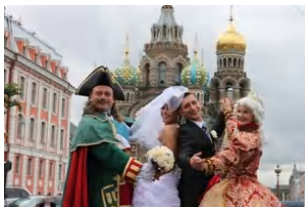


見たところ花婿は黒かグレーまたは白の背広か礼服でした。でも結婚式での主役はなんといっても花嫁。スラリとしたドストエフスキー白い肌に美しい金髪。白いベールと純白のロングドレスは、新緑の周囲の木々に映えて、輝くばかりに美しかった。

教会で式を挙げてきたばかりのカップルが、近くの公園や橋またはモスクワ大学の前庭などで、記念写真やビデオ撮影をしていました。そんなグループを見つけると、同行の通訳にロシア語でのお祝いの言葉を教えてもらい、私も大声で祝福の言葉を贈ったのです。

「シャスリーバ！」（お幸せに！） そんな私の呼びかけに、なかにはニコッと微笑んで応えてくれる花嫁もいました。カップルを囲む若い仲間たちから声が上がります。

「ゴーリカ！」「ゴーリカ！」。もともとはロシア語で「苦(にが)い」という意味だそうですが、そこから展開して「苦いからもっと甘くせよ！」、つまり「もっと甘いところを見せてくれ！」との呼びかけ（囃し立て）らしいのです。



そんな声がかかると、カップルはひしと抱き合い熱くながーいキスを何回も繰り返していました。カップルがキスをし始めると、周囲が「アジン(1)・ドヴァー(2)・トゥリー(3)！」とその長さをカウント。それを“撮影班”が入念にカメラに収めるというわけです。私もその後列に加わったわけです。



6月の日本は梅雨の季節ですが、寒くて長い冬が明け新緑が広がる6月は、ロシアでは一年で最も美しく過ごしやすい時。「June Bride」(ジューン・ブライド「6月の花嫁」)の慣習は特にないようですが、短い夏の間を最大限に生かしての“結婚式ラッシュ”なのかもしれません。



「ロシア文学紀行」という少しばかりお堅いテーマの旅は、思いもかけなかった甘い場面との出会いの連続で、心温まる楽しい旅ともなったのでした。

フランスを舞台の作品二つ



そして昨年は、発刊から 150 年となるヴィクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」とアレクサンドル・デュマの「三銃士」の舞台を 7 月に訪れました。今ちょうど「レ・ミゼラブル」の映画が日本国内（世界中）でも上映されていますね。また 4 月からは帝国劇場で、その後いくつかの都市でミュージカルが上演される予定にもなっていますね。

一切れのパンを盗んだがゆえに 19 年間投獄されたジャンバルジャンが、出所後に受け入れを拒まれた冷たい社会の中で、唯一、温かく受け入れてくれたミリエル司教の姿に改心、やがて孤児コゼットを命をかけて守り育てていったというストーリーですね。

背景には当時のフランスの政治状況や革命の流れが織り込まれ、原作は深いヒューマニズムに貫かれた大河小説です。簡単にまとめることもできません。詳しくはこちらもHPをご覧ください。ここでは面白い夢物語をご紹介しますと思います。

ああ、ハグできなかったマドモアゼル！

パリに到着した日、少し時間があつたのでオペラ座で公演中の舞台を観賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

急だったので予約席券はありません。入り口で自由席券を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。隣の席には若くて美しいフランス人女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

「お隣に座ってもよろしいですか？」

彼女も私の英語がわかったらしく「ええ、どうぞ」とニコリとうなずきました。（フランスでは英語のできる人が意外に少ない。英語ができてでも自国語＜フランス語＞への誇りから話そうとしない人もいます）。親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとするフランス人作家二人の作品の舞台や場所について相談しようと思い話しかけました。と、彼女は言ったのです。

「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。あなたが訪れようとする作品については私もある程度は知っていますから参考になるお話をできるかもしれません。よかったら自宅にいらっしゃいませんか。そんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな！”

私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近くでした。

「よろしかったらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれたのです。そして言いました。

「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言うと彼女はバスルームに入っていました。部屋にひとり残された私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。10分ほどして彼女がバスルームから出てきました。

と、なんとという驚き！！

彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通って見えてきます。私はショックでどこに目をやってよいかわからず、いすに座ったまま動きがとれずにいました。と、彼女はぐんぐん私に向かって歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いつき彼女を抱きしめようと両手を広げました。

ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした
パリのオペラ座
目をこすりながら、ホテルのベッドの上で枕を抱いていたのです。



文学紀行の楽しみ

こうして、現在まで訪れた15の作品はすべて外国文学ですが、これからは日本文学も、また年もとってきたので特に温泉が舞台となっている作品にも取り組んでいきたいと思っています。いっぱいありますよね。

夏目漱石の「坊っちゃん」、川端康成の「伊豆の踊子」や「雪国」、志賀直哉の「城の先にて」、島崎藤村の「夜明け前」等々・・・そしてこれは温泉ではありませんが、最後には芭蕉の「奥の細道」の片りんでも辿ることができればと考えています。

もし、今日の私の話をお聞きになって、外国語がおできになり自分もこんな紀行をやってみたいという方は次に述べる留意事項をもとにすぐにできると思いますし、もし言葉の面で御心配な方は、ご自分の好きな日本の文学作品の舞台を訪ねる「日本文学紀行」も人生を大きく充実させてくれるであろうと思い、お勧めしたいところです。

文学紀行にはいろんな形の取り組み方があると思いますが、私流のやり方をご参考まで紹介しますと：

- I. まず取り組みたい作品の再読から始まります。若い時に読んだ本も人生の年輪を経た今、読み直してみると新しい発見や異なった感想が湧いてくることもあります。また思い切って未読の「読みたい」作品に取り組むこともよいでしょう。ページをめくりながらのワクワク、ドキドキは、身体のみならず心も枯れかけているシニアに瑞々しさをもたらしてくれます。
- II. ついでに他人の書いた紀行や評論等があれば参考にします。今はネットを探ってみる

と、あらゆる情報がゲットできます。紀行文を書くための基本的なデータはほぼネットから得ることができるでしょう。

III. 事前の準備で膨らんだイメージを胸に作品の舞台を訪れ、あれこれと想像をめぐらせてみます。なかには先ほど触れた「ロミオとジュリエット」の舞台のように、作品が有名になってからその内容に合わせて後から舞台が作られているというケースもあります。そんな経過を推量するのも楽しいものです。

IV. 観察した現地の様子と自分らしい分析や感想をなるべくその場で記録しておくこと。私はその場が無理ならばホテルに戻る電車の中とかホテルで概要を書き留めてしまうようにしています。帰国してから自宅でゆっくりまとめるのもよいですが、どうしても臨場感に欠けてくるからです。

V. 次いで他人の書いた紀行や評論も参考に、場合によっては著作権に留意しながら必要な部分を引用させてもらったりすると、自分の書いたものに広がりや奥行きが出てきます。

VI. せっかくなのでいろんな角度から写真も撮ってくる。30年近く前の自分の特派員時代と違って、現在はデジカメを初め、カメラの機能が飛躍的に進歩しています。素人でもプロに準ずるような素敵な写真撮影も可能ですから。

VII. 訪れた先では思わぬ出会いに遭遇することもあります。「戦争と平和」「罪と罰」の取材で訪れたロシアでは、行く先々で新婚のカップルに遭遇し、お祝いの声をかけながら写真も撮ってきました。本来の取材予定外の写真と短いエッセイは、追って「June Brides in Russia」とのタイトルで女性誌にも掲載されたのです。

ところで取材旅行にはお金がかかります。原稿料などが入ることがあれば越したことはありませんが、なかなか難しいのが現実です。でも一つの作品に取り組んでまとめる作業は、単なる観光旅行よりもはるか創造的な楽しみや充足感で心を満たしてくれます。その満足感が自分への原稿料ともとれると思います。何よりも、自分が楽しんできたのですから、それだけでも“モトをとった”くらいに考えていくと気が楽になりますね。

幸いに私の場合は、ホームページを開いているのでそこに掲載し、関心のある方にご覧いただいているところです。

それでも一番の課題はやはりいかに旅費を安く抑えるかでしょう。そのためには取り上げる作品が決まると、できるだけ早くフライトの予約をします。早ければ早いほど安い切符が手に入ります。これを私はネット上か近くの旅行社で手配をしてきました。

次にホテルの予約。これもネットか旅行社を利用しますが私の場合、最高でも三つ星のホテルです。ときどき訪れた現地で豪華な五つ星ホテルに宿泊しているシニアやOL、女学生に会うこともあり、少しばかりのやっかみや悲しみみたいなものを感じることがありますが、それはそれで割り切って！

「なんたってこちらは年金生活者。それが海外に出てくることできるだけ幸せじゃない

か。単なる観光以上の楽しみを創りだしているんだし・・・」なんて自分に言い聞かせているわけです。

定年後の私をこのように突き動かしている原点は、HPのプロフィール欄でも紹介しているドン・キホーテの次の言葉です。

「理想と正義に向かって突進するオレのことを皆はおかしいと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそおかしいんじゃないのかね・・・」



熟年よ大志を抱け！

「定年後はHaving でなくBeing が大事」だと思うのです。財産や貯金を持っていること<Having>も大事ですが、今、何をやっているか<Being>が問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題なのです。夢が、志が人を創る。大きな夢と志は大きな人生を創るのです。

私は定年後にスペインに1年間留学しましたが、戻ってきてからまもなく鬱になってしまいました。原因は病院でもよくわからなかったのですが、いろんな諸要素がからんでいたと思います。どん底にあった一時は「いつ死んでもおかしくない」といった状況にまでありました。

幸いにも、鬱は1年弱でなんとか乗り越えることができました。そして、そこから文学紀行が始まったのです。この鬱の体験をお話するだけでも1時間以上になってしまい、今日のテーマでもないので省きますが、今は社会的にも大事なテーマとなっていますので、いつか、どこかで、何かの機会にお話ししたいと考えているところです。どのような状態になり、どう乗り越えてきたか——この辺の経過はホームページの「ミニ自分史」でも綴っています。

この半世紀の間に日本の経済は発展し、今はそれなりに生活のゆとりも出てきました。そして高齢化社会の到来により、この長寿の人生を、老後をどう充実させていくかが、個人でも社会でも大きな課題になってきたわけです。

世界で最長寿国の日本。人生80年から100年の時代です。平均でも定年後まだ20年の人生が前途に横たわっています。

フランスでは「年金生活」という言葉は、晩年と言うよりも第二の人生、といった前向きな意味合いが強くあります。アメリカ人は、第一線を退くと、いよいよこれからの人生を楽しもうとして服装や化粧も派手になる。

こうした面からいうと、定年は今やゴールではなく、豊かな可能性をはらんだ次の人生のスタートともいえます。

101歳で今も聖路加国際病院の理事長であり、シニアのアイドルとも言える日野原重明さんは、「頭の体操」シリーズでベストセラーになった多湖輝（あきら）さんとの対談「長

生きすりゃいいってもんじゃない」との著書で言っています。

「どれだけ長く生きるかではなく、どれだけ深く生きるかが大切です」。そして、「新しいことを創（はじ）めるのを放棄したところから老いが始まる」と主張しています。

かつて札幌農学校校長のクラーク博士は言いました。

Boys be ambitious! 少年よ大志を抱け!

私はこれをもじって、

Seniors be ambitious! 熟年よ大志を抱け!

と訴えたいと思っているところです。

やりたいことがあるか、行きたいところがあるか、会いたい人がいるか、ときどき点検を試みるのもよいと思います。

お金がたくさんあるから充実した生活を送れるのではない。生きる知恵があってこそ、希望に燃えた楽しい生活を送ることができるわけです。世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいあります。

最初に取り上げました『ドン・キホーテ』のなかで、従者のサンチョ・パンサが言っています。

「人間、寝てえるうちは、身分の高め者も低い者も、貧乏人も金持ちも、みんなおんなじでさ」

「この世を捨てて、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇いも、おんなじように窮屈の道を歩くだし、法皇様のからだも給仕係のからだも、よしんば背丈にちがいはあろうと、占める広さには変わりはない」

——たしかに、誰でも寝るときは、あるいは死ぬときは、どんなに頑張ってみても、たたみ2畳以上を独占することはできないですね。それにどんなにお金や資産をためていたとしても、それを死後の世界に持っていくことはできません。

仏典に「蔵の財より身の財、身の財より心の財第一なり」との言葉があります。蔵の財とは、いわゆるお金や資産ですね。身の財とは、地位や名誉、また健康というところでしょう。そして、心の財とは、人間としての生きかた、他人を思いやる心、もっと言えば、それは志ともいえるでしょう。そして、お金や資産、名誉や地位よりも、人間としての心を、生き方を豊かにしていくべきだ、との教えだと思います。

夢こそ未来を拓く力

先ほどお話した「レ・ミゼラブル」の取材の際のエピソードは、寝ている（うたたねの）間にみた夢でしたたが、もう一つの、もっと積極的な未来に実現しようとする「夢」は、別名で「目標」とか「希望」または「ゴール」とも言えるでしょう。その「夢」について今年の私の年賀状で触れましたのでそのままご紹介してみますと——

明けましておめでとうございます。

6回目の年男。でも巳年の動物は苦手という不思議な不一致——そこで毎年書いてきた千支の由来は控えさせていただきます。

仲間からは「ここが痛い」「あそこが思うようにならない」なんて便りが届くようになってきました。

となれば体力づくりこそ！今年も1日1万歩、マンション7階の部屋まで階段を上ることを目標に、水泳、テニスで少しでも鍛えていきたい。

「心」の面では二つの外国語のレベルアップと文学紀行。日中関係が落ち着けば「三国志」の舞台の一つ赤壁を訪ねてみたい。そのためにもしっかりと仕事もして取材旅費を蓄えなければ・・・忙しくなりそうだが年男だからガンバルべえ——これが東京のドン・キホーテの“見果てぬ夢”です。

夢を抱くことはただ（無料）。夢を描くことによって人生そのものが楽しく見えてきます。仮にそれが結果的に実現できなくても、日々の生活に希望とほりを持たせてくれるから夢は描かなければ損。今年も夢（なるべく大きな）を広げていきましょう。

皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

2013年 元旦

といったものでした。

仮に年老いてきても夢を抱いている、目標を思っていることが大事だと思います。いつか叶ってきます。もちろん、そのための努力も大切ですが・・・。心に描いていないことが実現することはあり得ないからです。

日野原さんのアドバイスのように、私が定年後に新しく始めたことは4つあります。料理ギター、ゴルフ、そして川柳です。



料理は定年1年目にクッキングスクールに週1回、1年間通いました。現役時代にはインスタントラーメンをつくるくらいが精いっぱいだったのが、今は和・中・洋で100以上のレシピがあり、来客の際には家内より私が料理の腕をふるっています。

他の三つは、残念ながらいまだに初心者の域を出ませんが、それでも「新しい世界を楽しむ」ことで、ずいぶん生き方が豊かになったような気がしています。

もう一つ。年賀状でも書いた「二つの外国語のレベルアップ」では、ちょうど私の誕生日と重なる来月17日にTOEICの受験をする予定です。現在のレベルを知り、もっと高めていきたい。仕事でもボランティア活動でも、自分ができた分だけ関係の人の役に立っていくことができるからです。

そのための勉強と、当日の試験の2時間余りの集中は、高校や大学の受験とは異なり、快い緊張が自分の脳を活性化してくれるような気がするのです。私は昨年から、毎年1回、誕生日前後に受けようと決め、今年がその2回目となるところです。

セルバンテスが「ドン・キホーテ」の後篇を出版したのが68歳、ゲーテが「ファースト」の総仕上げの執筆を開始したのが76歳であったと知ると勇気が湧いてきます。

第二の人生とは単なる趣味や道楽のみではなく、日野原さんの言う通り、何か新しいこ

とを始めてみるチャンスだと思うのです。ドラマでも最後の幕が一番実があり感動的なものですね。残りの人生をどんな色に染め上げていくことができるかは、まさに各人の腕の見せ所となってくるのだと思います。

定年後を輝いて生きるために

そして最後に——人生を充実させ、輝かせていくカギは、私は冒頭に申し上げた「ハゲアタマ」にあると思っています。イヤ、私のこの頭のようにする必要はございません。

散髪の料金は安くならないけれど、「はげあたま」も決して捨てたもんじゃない。「定年後を輝いて生きる」ためには、この「はげあたま」、つまり「はつらつ」と「げんきに」「あかるく」「たのしく」そして「まあるく」生きていくことです。〈板書〉

特にこの最後の「まあるく」が大事ですね。人生、すでに甘いも辛いも経験し、角が取れて「まあるく」なってきたはずですから、今さら人間関係でギスギスしてもしょうがない。穏やかに「まあるく」行くことです。



そして自分のためだけにキュウキュウしているのではなく、人を助け、人を讃え、人を褒めていくことです。そうすれば自分が助けられ、讃えられ、褒められるようになっていきます。人生の満足は、どれだけ多くの人々の笑顔を作ったかにある、とも言われます。

「人のために灯（あかり）をともしれば、自分の前も明るくなる」と言われるとおりでしょう。自分が明るく輝いていけば周囲も明るくなっていきます。

いつも感謝と笑顔の習慣を。そこから人生が輝いてきます。つまらない顔をしていると、つまらない人生になってしまいます。

生命に弾むような勢いがあれば、必ず人生も躍動してくるでしょう。私はこれからもこの「ハゲアタマ」をモットーに生きていたいと思っています。今、髪のみさふさの方も、どうぞこのモットー実践だけはお勧めです。人生が明るく楽しくなってきます。

世界の文学作品の紹介から生きがい論へ、そして禿げ頭論へと、話しはあっちこちに飛んでしまいましたが、皆様が何かをお感じになり、今後の人生のヒントとなり、ご参考になればこんな嬉しいことはございません。

これをもって私の話は終わらせていただきます。長時間のご清聴ありがとうございました。

※各文学作品に関するレポートと多数の写真を、このホームページの「名作の舞台を訪ねて」に載せていますので、関心のある方はご覧ください。